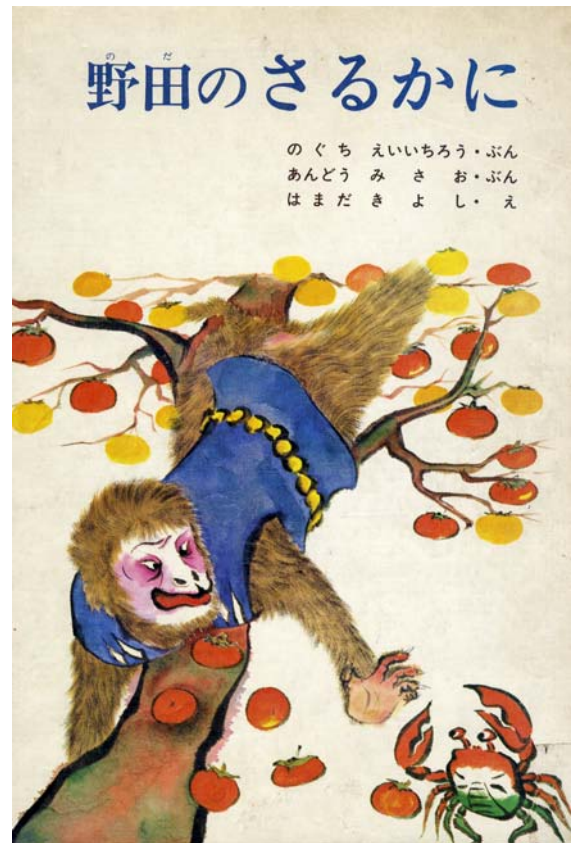


# 野田の口承文芸

(のだのこうしょうぶんげい)



野口栄一郎・安藤操『野田のさるかに』  
(1976年 株ほるぷ出版)

「口承文芸」とは、親から子へ、子から孫へ、あるいは近所の物知りで話し上手な人などから口伝えに語り継がれた話のことです。うわさとして広まった「世間話」、具体的な事物と結びつけて語り継がれた「伝説」などありますが、何といたっても代表的なものは「昔話」です。野田市に昔話？ 結びつきにくいイメージがありますが、「昔々、大昔、猿と蟹がいたとよ。猿と蟹は野田市(いち)へ行ったとよ。……」という語り出しで始まる「猿蟹合戦」。「大きい家だかんね。たくさん昔、やってたから、奉公人使った。んで、その、『今日はゴロスケやゴロスケや、あのシバの畑うなって来い……』」という始まりの「仕事は弁当」の話。いずれも全国的に語られている話ですが、「猿蟹合戦」では野田の市(いち)のことが、「仕事は弁当」の話では、地元の豪農の家に奉公する人の話として語られています。この二話の昔話は平成になってから採集したものです。

昔話は野田市においても、風俗、習慣を反映しながら多く語り継がれていたようです。明治から昭和初期ごろまでに生まれた人の多くは、幼いころから昔話を聞きながら育ったといえます。当時、夜、子どもを寝かしつける時、夕食後の家族団欒の時、俵作りや縄ないなどの夜鍋仕事をする時、農作業の休憩時、念仏、寄り合いなどで集まった時…など昔話を語る機会は多々ありました。また、各家の祖父母、父母、近所の話し好きなお年寄り、嫁ぎ先の義父母…など語り手もたくさんいました。昔話は日常生活の中に自然に溶け込んでいたようです。そしてそれは単なる娯楽にとどまることなく、心の豊かさ、よりよく生きるための心構え、道しるべにもなっていたようです。

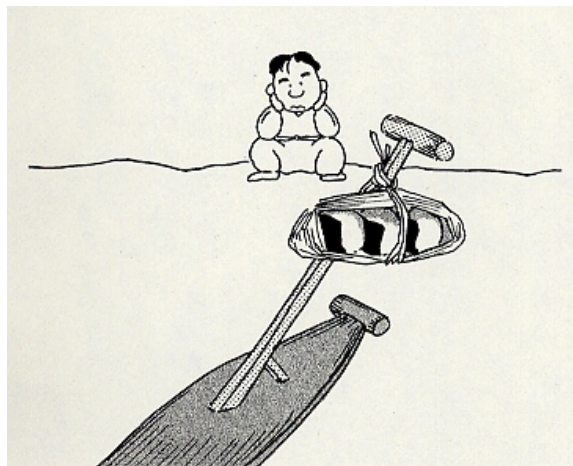
しかし、野田も戦争をはさんで生活が大きく変化していきました。著しい経済成長の変化、機械化、絵本、テレビの普及…などにより昔話を語る機会は急激に失われつつあります。昔から地元の人々によって大切に語り継がれてきた昔話。一話でも多く残したいものです。

《詳しくは…》

\* 『野田市民俗調査報告書』各号 野田市

### 「仕事は弁当」

それから、あの、もう一つ、その家の、名前忘れた。やっぱり奉公人いた。大きい家だかね。たくさん昔、やってたから、奉公人使った。んで、その、「今日はゴロスケやゴロスケや、あのシバの畑うなって来い」って言われた。「はい」「じゃあ、その代わりな、御飯と弁当たくさん持ってけ」って言ったわけ



だね。そうしたら、イグワ、昔はイグワでうなったつった。そのイグワの先へ大きい重箱で下げたんだって。あの、弁当、いっぱい仕事できるように、重箱って弁当箱だいね。ところが、御飯だとか色々な、その重箱下げてから、今度(こんだ)、「じゃあ旦那行って来ます」ってこう言ったわけね。したら旦那が見ていて、イグワの先、こう重箱入ってるでしょう、お昼のあれだね。それで、「ゴロスケや、そんなに大きな弁当持ったんじゃあ、今日はうんと仕事できるだろう」って言った。「まあうんとやって来い」それで、「はい、行って来ます」って行ったわけだ。んであの、無事に畑について夕方、弁当持ちだかね。夕方帰って来て、「ゴロスケやゴロスケや、今日はずいぶん畑うなえたんべ」つったら、「いや旦那そのこと、あの、こういうふうにイグワの先へ弁当下げて置いたけれども、ひとつも働かなかった」って言ったって。「弁当働くんだ」って言ったから、「いや、一日(いちんち)ね、弁当イグワに縛りつけて置いたんだけれども、弁当ひとつも働かなかった」って。そういう話なのね。

(目吹 倉持連次郎氏より聞き取り)

### 「猿蟹合戦」

猿と蟹が、ん、ちょうど蟹さんが出て来たところへ、あの、お猿さんが来て、「蟹どん蟹どん、今日は野田市(いち)へ行こうじゃねえか」って言われて、蟹さんがね、猿さんのいうとおり、二人でまあ、お猿さんと蟹どんだから二人っていうわけにもいかねえでしょうけれども、まあ二人集まってね、あの、猿さんが、「蟹どん蟹どん、野田市(いち)へ行こう」つったら、「はい」つってあの、出かけてまあ、歩いて行ったんだって。そうしたところが、あの、蟹さんが先に握り飯を一個拾って、んでその後から行った猿さんが柿の種を拾ったんだって。そうすると蟹どんは、お猿さんがお利口なもんだから、蟹に、「蟹どん蟹どん、そのお握りじゃ食べらんねえから、この柿の種をくれるから、そのお握りちょうだい」つって。昔だからちょうだいつつたんじゃねえでしょう。その握り飯をくれてね、その握り飯とその柿の種を交換しちゃったんだって。

<以下略>

(目吹 笠見とい氏より聞き取り)